

ボランティア活動による学生たちの学び

—「ちびっこ教室」の企画・運営から得たもの—

小方 朋子・池北 真紀*・千田 洋世*・中尾 規陽子*・永野 来美子*
(特別支援教育) (特別支援教育コース04生)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

The Impact of Volunteer Work “Chibikko Kyoshitsu” on Student Learning

Tomoko Ogata, Maki Ikegita, Hiroyo Senda, Miyoko Nakao, and
Kumiko Nagano

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 「ちびっこ教室」とは、香川大学教育学部障害児教育の研究室（現：学校教育教員養成課程特別支援教育コース）が長年、元養護学校教員の方とともに企画運営してきたボランティア活動の名称である。月に一回、障害のある子どもたちと一緒に楽しめるような様々な活動を行ってきた。特別支援教育コースに在籍している学生たちは2年生から4年生までこの活動に参加することになっている。この活動のほとんどの運営を任されている学生たちが、企画・準備・実践などを通して何を学んだと思っているかを明らかにした。

キーワード ボランティア活動 特別支援教育 教育実習 学生主体

1. はじめに

ちびっこ教室は、昭和46年から始まり昨年で35周年を迎えた長い歴史をもつボランティア活動である。小野輝子先生（元養護学校教員）と香川大学障害児教育の研究室（現：特別支援教育支援コース）の学生ボランティア30名程度で、「どのような障害があってもいろいろな遊びを通して経験を広げること、お母さんにはリフレッシュタイムを作ることを目的とし、小学1年生から中学2年生までの障害児とそのきょうだいを対象に毎月1回行ってきた。子どもに学生が一对一でつき、自由遊び、ボール運動、

簡単な工作、お絵かき、ゲーム、リトミック、野外活動などいろいろな企画をたて、実施してきた。平成16年度には、県知事よりボランティア賞を授与された。

このちびっこ教室は香川大学教育学部学校教育教員養成課程の特別支援教育コースの学生達にとっては、卒業までの3年間同じコースに所属する仲間達と企画、運営、準備、実施のほとんど全てを自分たちの力でやり遂げる活動である。

学生達が中心であり、毎年メンバーが変化していることから、これまでの活動に関する資料があまり残っていない。どこかで記録しておく

ないと、学生達の記憶だけになってしまうため、これまで携わってきた関係者に取材し、ちびっこ教室の概要を残しておくこととした。またこれらの活動の中で学生達は何を得てきたのかを確認しておきたい。

2. 概要

このちびっこ教室を立ち上げた小野先生をはじめ、これまでちびっこ教室にかかわってきた養護学校教員養成課程卒業の先輩達に話を聞き、これまでどのような活動を行ってきたのかをまとめてみた。

〈昭和50～60年ごろ〉

教室が始まった頃は、重度の子どもが中心に参加しており、お母さん同士の交流も多くあったようである。当時は、中野保育園で行われており、参加していた子どもの数は10人ほどだった。毎年少しずつ子どもの数は増えていったようである。学生は絶対参加ではなく、余裕のある人が企画をしていた。現在はメインイベントであるクリスマスの行事もこの頃は特に大きな行事ではなかった。

その後、場所は総合福祉会館に変わった。子どもの数は20人ほどで、主に知的障害のある子どもが参加していたが、車椅子の子どもも若干名いた。研究室の学生がこの活動に参加するのは当たり前ようになっていた。医大生も4～8人参加していた。この頃、企画は学生が季節にあったものを用意し、教室の始まりはリトミックであり、現在行っている活動の形はこのころできあがったようである。ただ、峰山での活動があったり、家庭訪問が行われていたり、現在とは異なることも行われていた。

〈平成6年ごろ〉

現在と同じく、大学の教育学部の体育館で活動していたが、学校外での活動もたくさんしており、毎年4月の峰山でのハイキングや屋島水族館にも行っていたらしい。子どもは、2、30人ほどで、知的障害の子どもが多く、小学生がほとんどであった。研究室の学生は実質全員参加だったが、他研究生や医大生の参加もあり、

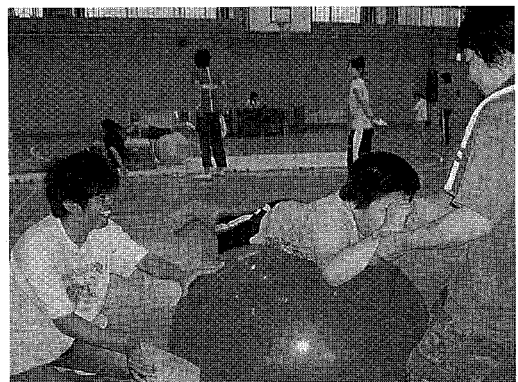
医大生だけの企画もあった。

また、家庭訪問も引き続き行っていたらしい。家庭訪問は、学生2人1組で行っており、保護者とも仲良くなって食事に行くこともあった。毎月「ちびっこを100倍楽しむ方法」というレジュメを作って、子どもと関わるときのコツや注意点を企画のときに周知するなどの工夫もしていた。

〈現在〉

現在は毎月一回、教育学部の体育館で、小学1年生から中学2年生までの自閉症の子どもを中心とした知的障害のある子どもたち25人前後を対象として活動を行っており、特別支援教育コースの学生は毎回30人ほどが参加している。企画は、2、3年生を中心として季節に合ったものを行うようにしている。2、3年生の縦割りりで構成されている78人のグループのうち、担当のグループが、毎月2、3週間かけて企画の準備、当日のちびっこ教室の運営を行っている。現在は、学校外での活動はないが、バスや電車を使ったお出かけなどを行ってほしいという保護者からの声もある。しかし、安全面ということを考えてなかなか難しく、現在は行っていない。

特別支援教育コースの学生は、各学年の半数がちびっこ教室の担当（通称ちび役）となっており、ちびっこ教室に関わる仕事の中心となって活動している。事前に子どもの出欠の確認、ちびっこ教室に関するお金の管理、各家庭に郵送する手紙「お母さんへの一言」の用紙作成な



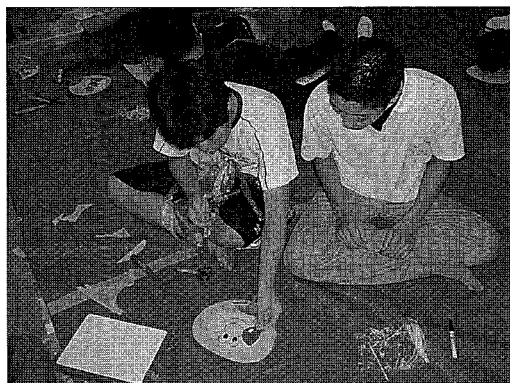
ボール遊びの様子

ど、それぞれ分担している。また、1年間の活動の中で大事にしている12月のクリスマス時の企画には、2,3年のちびっこ担当の役員だけで内容を考えている。簡単なデザートを作ったり自分たちで台本を作って劇をしたりと、一年の中で最も力を入れて行っている。

2008年3月

ちびっこ教室のタイムスケジュール

10:00	ちびっこ集合
10:30	はじまりのあいさつ・リトミック
10:40	紙しばいを見よう
10:50	おひなさまを作ろう
11:20	桃の花を手に入れよう ①あられ入れゲーム ②つくし輪投げゲーム ③お花を咲かそうゲーム
11:40	桃の木作り
11:50	写真撮影
12:00	お昼ごはん
13:00	劇を見よう
14:00	写真撮影
14:10	卒業式
14:20	終わりのあいさつ・リトミック



工作の様子

保護者とのやりとりには、1年の始まりにサポートブックを作るために子どもの情報を書いってもらうこと、電話で子どもの出欠を確認すること、ちびっこ教室当日の子どもが来た時や帰る時の子どもの様子を確認して報告すること、ちびっこ教室での子どもの様子を記した手紙を保護者へ送付することなどがある。また、ちびっこ教室に参加する子どもの募集は公には

行っておらず、現在参加している子どもの保護者による口コミで来ることが多いが、とぎれることはなく、問い合わせは多い。時には何年か待ってもらうこともある。

また、子どもへの対応も教育実習の経験などを生かし、例えば、言葉でコミュニケーションをとることが難しい子どもには、コミュニケーションカードを用いて関わったり、工作やゲームも能力別に準備したりして、なるべく全員の子どもが楽しんで遊ぶことができるように配慮している。

終了後は小野先生を交え、子どもと接して困ったことやよかったことを学生同士話し合う時間を設けている。対応が分からない場合には小野先生に助言していただき、その日のちびっこ教室の感想をいただいている。毎回、同じ人が同じ子どもにつくわけではないので、このような情報交換をととても大切なことだと考えて活動を行っている。

3. ちびっこ教室を通して学生たちが学んだこと

— 学生を対象にしたアンケートから —

運営全てを自分たちで行っている学生達はこのちびっこ教室に3年間かかわることによって様々なことを学んでいる。そこで2006年に05L, 04L, 03Lの特別支援教育コースの学生達を対象としてアンケートを実施した。総回答数は42である。

以下はアンケートの結果である。

【1】ちびっこ教室が今年で35周年を迎えることを知っているか。

はい・・・18人

(小野先生や、上級生から聞いて、33年目に表彰された時に知った。)

いいえ・・・24人

【2】ちびっこ教室の活動目的の一つとして、「保護者にリフレッシュタイムを作ること」が挙げられていますが、保護者はリフレッシュできていますか。

はい・・・39人

どちらとも言えない・・・2人

いいえ・・・1人

「はい」と答えた理由としては、「自分の自由な時間を持つことができるから」という意見が多く、中には保護者本人から「リフレッシュできている」と聞いた学生もいた。

「どちらとも言えない」「いいえ」の理由として、兄弟児の世話や自分の仕事、ちびっこ教室への送迎の手間がかかるなどが挙げられた。

【3】ちびっこ教室の利点と問題点は何かとありますか。

〔子ども・保護者にとっての利点〕

保護者のリフレッシュ、子どもが様々な体験ができる。具体的には、同年代の友達や大学生と一緒に過ごすことで、集団の中での活動に慣れることができ、企画に参加することで余暇の過ごし方の幅を広げられる。

〔問題点〕

- ・教育の場なのか、遊びの場なのかという境界線が曖昧（目的がはっきりしていない）で、支援の範囲、程度を決めかねる
- ・ひとりひとりの子どもについて、把握するのに時間がかかる
- ・子どもに対しての共通理解ができていないため、対処が遅れたり間違ったりすることがある
- ・能力差によって、子どもができることが異なるため一斉にできる企画を考えるのが難しい
- ・支援する側のスキルの差があるため、子どもに適切な対応ができるとは限らない
- ・保護者の意見や、子どもがどう思っているのかがわからないので、意見交換の場があれば良い

【4】ちびっこ教室に参加することで、自分にプラスになったことはありますか。

はい・・・42 いいえ・・・0

- ・実際に子どもと関わりながら、コミュニケーションの取り方や工夫・注意点を学べ

ること

- ・ひとりひとりの違いを知り、その子にあった接し方や支援を考えられること
- ・障害のある子どもと関わるのが楽しいと感じること
- ・人前で話すことや活動することへの抵抗が少なくなったこと
- ・他の学生の子どもたちへの接し方を見て、自分の参考にできたこと
- ・研究室の仲間と仲良くなれたこと
- ・保護者と話す機会ができたこと

【5】今までの企画の中で、印象深いものがありましたら教えてください。

- ・12月クリスマス会の劇
学生が作ったオリジナルの劇の中で、ゲームやお菓子作り等を企画として盛り込んだもの。
- ・プール遊び
体育館の前に、ビニールプールを3つ用意し、水鉄砲や子どもが作ったおもちゃで遊ぶ。
- ・たこ揚げ
ビニール凧を作り、グラウンドで揚げる。
- ・散歩
季節に応じた作り物（いちご、昆虫、木の实など）を構内に置き、子どもが散歩しながら集めていく。
- ・リトミック
学生オリジナルのもの。ちびっこ教室の始めと終わりに2曲ずつ踊る。

【6】ちびっこ教室へ参加することで将来に活かせるようなことはあると思いますか。

- ・教師になった時に、抵抗なく障害のある子どもと向き合うことができる
- ・教師にならなくても、将来、障害児・者と会った時に対応することができる
- ・障害の有無に関わらず、「子どもの活動しやすい環境」を自然と考えるようになったこと
- ・企画の際に協力することで、計画性や協調

性が培われること

【7】ちびっこ教室をどのような場として捉えていますか。

- ・子どもと楽しく遊ぶ場
- ・子どもの余暇
- ・子どもとの関わり方を実践的に学べる場
- ・経験、勉強する場

【8】今後のちびっこ教室ではどんなことをしたいですか。

- ・学外に出かけたいと考えている学生が多い（公共の交通機関を使って遠足など）
- ・企画ひとつひとつに目的を持って行った方が良いと考える学生もいる
- ・子どもの実態に合わせた工作やゲームを企画していきたい

【9】その他（感想・意見）

- ・学外に出かける企画に対しては、不安に思う
- ・保護者との関わりを取りたい
- ・他の学部生、教師を目指している学生にも障害児と関わってもらいたい
- ・様々な障害種の子どもを受け入れて欲しい

以上のように学生達は様々なことを考え、学びながら活動している。ちびっこ教室は、「子どもと楽しく遊ぶ場」「子どもの余暇」であるとともに、学生は「子どもとの関わり方を実践的に学べる場」「経験・勉強する場」だと感じている。

具体的に、学生が自分自身にとってプラスになっていると感じることは、「実際に子どもと関わりながら、コミュニケーションの取り方や工夫、注意点を学べること」「一人ひとりの違いを知り、その子に合った接し方や支援を考えられること」という技術的なことや、「障害のある子どもと関わるのが楽しいと感じること」「人前で話すことや活動することへの抵抗が少なくなったこと」という指導または支援する側に立つ者としての自覚が出てくることなど

意識の変化、「ほかの学生の子どもたちへの接し方を見て、自分の参考にできたこと」「研究室の仲間と仲良くなれたこと」「保護者の方と話す機会ができたこと」という学生同士のつながり、保護者とのつながりができたことなどが挙げられる。また、ちびっこ教室での経験を教育実習で活かすことができたという回答もみられた。

さらに、ほとんどの学生がこれらの経験は将来に活かせると考えている。例えば、アンケートの結果には、「教師になった時に抵抗なく障害のある子どもと向き合うことができる」「教師にならなくても、将来障害児・者と会った時に対応することができる」とあり、また「障害の有無にかかわらず‘子どもの活動しやすい環境’を自然と考えるようになったこと」という回答には指導、支援する側に必要な基本的な姿勢を得ることができたと言えるだろう。

また学生達の考えるちびっこ教室の問題点には次のようなものが挙げられた。

まず、1つめに支援の範囲や程度についてである。ちびっこ教室の性格上、指導（教育）の場なのか、遊びの場なのかという境界線が曖昧である。危険なことや、衛生的に問題があることなどは指導するが、その他の場面で注意をするか、許してしまうのか、学生たちも迷いながら支援を考えている。

2つめに、子どもの実態把握が難しいことである。これは、学生ボランティアが毎月違う子どもを担当するために起こる。現在は、次回のちびっこ教室でどの子どもにつきたいか、学生に希望を聞くことにしている。しかし、マンツーマンで子どもと関わるため、違う学生がその子どもを担当することになったとき、一人の子どもに対する支援方法の共通理解が難しいことがある。これは、ちびっこ教室後の反省会で全員に周知することで、少しずつ改善されてきているが、今後の課題でもある。

3つめに、能力差に対する配慮である。ちびっこ教室では、能力差が大きいいため、一斉にできる企画を考えるのが難しいことがある。現在は、工作キットをレベル別にしたり、集団に

入るのが困難な子どもたち向けの企画を用意したりしている。

4つめは保護者の意見を聞く機会が少ないということである。子どもの実態を一番理解されている保護者の方からの意見は、ぜひ取り入れていきたいと多くの学生が感じている。現在の手紙のやり取りだけでは情報不足であり、意見交換などをする必要があると考えている。

いずれにせよ、ちびっこ教室をよりよいものにしていきたいという意欲が感じられる指摘である。

4. おわりに

月1回の活動ではあるが、障害のある子どもたちが楽しめる場を企画することは、学生にとって子どものことを考える貴重な機会であり、充実した時間を過ごしているように見える。学生達は、自分たちで運営し、企画し、準備に時間をかけ、実施しているからこそその苦し

さがあり、楽しさや充実感がある。この活動が35年以上も続いてきたのは小野先生のおかげであり、養護学校教員養成課程時代からの先輩達の努力のおかげである。

4年生になると就職活動や教員採用試験があるために普段の活動の中心は2,3年生だが、卒業する直前の3月のちびっこ教室は4年生の企画による。これだけは養護学校教員養成課程の時から変わっていない。自分たちの最後の企画のちびっこ教室をおえ、やり遂げたという充実感とともに特別支援教育コースの学生達は卒業していく。

決して効率よく運営されているわけでもなく、事故などの心配もつきない。しかしやらされる活動ではなくまさに自主的に子ども達一人一人のことを考えて活動を企画し、教材を工夫していくこれらの経験は、2年生は教育実習に繋がる活動であり、教育実習が終わってからの参加は実習の検証の場となる貴重な学びとなっているといえる。